第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら，先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては，倫理的諸課題について，倫理的な見方や考え方を働かせて，思考したり，批判的に吟味したりする問題や，原典資料等，多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　本問では，「友」という高校生にとって身近な問題について，高校生と先生が面談で意見交換したことをきっかけに，文献調査を進め，さらに考察を深めていくという場面を通して，倫理的課題について考察する力と教科書知識の基本的理解を問うた。場面設定については，リード文をⅠとⅡの二つのミニリードに分け，なおかつ各設問の間に会話を挟み込むことで，順番に資料を読み解きながら，理解を深めていくという時間的推移を伴うような工夫をした。以上のような取り組みの中で，友達との人間関係に悩むことが，ある意味友人関係を型にはめて考えていることに起因しているのではないか，友達との関わり方は多様なものなのではないかというメッセージを，高校生に届けることを心掛けた。

各小問について言及する。問１，友というテーマに関連して，友愛も含めた愛一般を考察した思想家について問うた設問である。標準的な難易度の問題である。問２は古典や聖典の内容について問うたものである。テーマと関連が薄い設問内容であるという指摘があった。分野バランスや過去問バッティングなどに配慮しながら，全ての設問をテーマと関連付けることはかなり困難ではあるが，それでも，もう少しテーマに近い設問にすることはできたかもしれない。問３は，愛に関して言及したアウグスティヌス「見えないものへの信仰」の資料読解と，アウグスティヌスについての正確な知識を組み合わせて解答させる設問である。友に関する議論が少ないキリスト教関連の分野を出題するために，テーマからやや離れた内容の資料を提示せざるを得なかった。問４は，『スッタニパータ』の資料読解と仏教に関する知識を組み合わせて解答する問題である。友と歩むことと一人で歩むことを対比的に描き出す資料であり，内容的にも大問のテーマに直接的に関係するものであった。教科書や副教材等でしばしば引用される資料であるが，より丁寧に読ませて，正確な理解ができているかを問う内容になっている。点検委員会からは表面的な理解を問い直すものとして常に高く評価されてきた。問５は，様々な先哲における知についての考え方を問うた設問である。④のエピクロスの原子論に関する記述は「細かい知識である」という指摘があったものの，この科目の教科書記述の乏しさを考えると，このような問題もある程度は出題せざるを得ないのではないか。問６は，様々な先哲における人間関係についての考え方を問うた標準的な難易度の知識問である。問7は，友愛に関して言及した，アリストテレス『ニコマコス倫理学』の資料読解問題である。資料そのものは大問のテーマや場面設定と強く関係していたが，教科書知識を正確に身に付けていれば資料を読み解かなくても解答できる内容であるという指摘を受けた。単なる資料読解問題ではなく，資料の内容を日常生活の具体例と関連付けて考えさせるなどといった工夫をすべきであった。問８は時代を離れた者を友とすることができるという趣旨の資料を読解する問題であった。「メッセージ性がある」という評価をいただいたものの，

一方で「平易」という指摘もあった。単なる資料読解問題ではなく，資料の内容を現在の課題に関連付けて考えさせるなどといった工夫をすべきであった。　全体として資料読解問題が多くなってしまい，その分平易になってしまった。純粋な資料読解問題は大問あたり一問くらいが適当かもしれない。また，古代の資料を日常生活の具体例と関連付けることは簡単なことではないが，断念することなく最後まで挑戦すべきであったかもしれない。

第２問　我が国の倫理思想を「学び」の観点から振り返り，昨今の教育改革の渦中にある受験者諸氏に己の「学び」の意義を見つめてもらうことを目指した。また，中問Ⅱの場面を紙上対話に設定し，新たな工夫を取り入れた授業案の示唆を試みた。各設問は，古代～近代の各時代，及び神仏儒，国学，蘭学など諸領域を万遍なく出題したが，　この意図は理解されていた。

問１は，後年の「実学」を支える実証性が，必ずしも西洋由来とは限らず，古学派や国学にも伏在していたこと，及び賀茂真淵の思想的理解を問うことを意図した。得点率や外部評価を見る限り，出題者の想定以上にこの点は理解されていた。問２は，日頃の授業では必ずしも一括整理されない神仏関係の理解を総合的・多角的に測った。イの正誤判定で迷った受験者が多い。「仏や菩薩は，日本の神々が」という二重主語に戸惑った可能性もあり，純粋に倫理の力を測定できるよう慎重な作文を心掛けるべきであった。問３は，崎門派分裂の契機となった山崎闇斎の身心理解を示す重要資料だが，その意義を十分に伝えきれていなかった点は今後の課題である。問４は，当初表現力の測定を意図したが，中問Ⅱは，紙上対話という場面設定をした都合上，小問内で場面設定を重ねることが難しく，結果的に問５・６・７が知識問題となってしまった。外部評価の指摘にもある通り，扱われた思想家が必ずしも倫理の授業で大きく取り上げられる人物ではない。その為，誤答選択肢に叡尊と明確に区別できる人物に設定し，得点率の極端な低下を防いだ。問８は，紙上対話の趣旨を踏まえ，「実学」重視を説いた福沢諭吉の資料を読み取り，その意図にsocietyへの貢献があったことを発見することで，「学び」の意義を総括する工夫を行った。総じて，外部評価の総評にある通り大問全体が結局知識問題と資料の読み取りが多く，思考力が十分には測定できていなかった点については，今後の問題作成にあたっては留意したい点である。しかし，良問の繰り上げには全力を尽くすことはできていたと思われる。

第３問　人間（ホモ・サピエンス）の「賢さ」とは何かというテーマで生徒が授業で学ぶ場面を想定した問題構成とした。人間の賢さをめぐる思想史の流れを概観するとともに，最終的に，自然との関わり方をめぐる，人間の賢さへの今日的な批判意識を視野に入れたものとなるように試みた。全体の構成は，人間の賢さをめぐる近代思想の流れを踏まえた先生の問題提起（Ⅰ），賢さへの問いを深めるための現代哲学からの原典資料の提示（Ⅱ），自然との関わりにおいて人間の賢さ（＝理性）を批判的に問う先生と生徒の会話（Ⅲ）というもので，それぞれの枠内で，関連する知識問と読解問題を配置するように工夫した。

問１は，機械論的自然観をめぐる思想を問う知識問であるが，各思想家の中心思想を的確に捉えているかを問う選択肢にしたため，やや難易度が高いと評価された。問２は，モンテーニュに関して資料読解と思想史的な知識と絡める問題として，良問である一方で難易度は高くないという評価であった。問３は，人間と自然の関係という補助線を引いた上で，社会契約説を説いた思想家とその思想の組み合わせを問う知識問であったが，教科書を学んだ生徒には標準的だろうと思われ，またそのような評価であった。問４は，人間における生のあり方を問うたニーチェとベルクソンの思想の理解を問うものである。その内容のしっかりした理解が求められるため，難易度はそれなりに高いと思われ，またそのような評価であった。問５は，シェーラーの資料の読解を問う問題である。シェーラーの思想はほとんどの受験者

にはなじみがないであろうから，主題に関して印象的なテクストを示すことに主眼をおいた。読解問題としては平易と評価されたが，この資料はまた，Ⅲ以降で問われる自然における人間の異質性という批判的観点への繋ぎともなるよう狙ったものであった。問６は，理性をめぐるカントの基本的な知識を問う問題である。教科書の標準的な知識で正答に至ることは容易のはずで，またそのような評価だったが，カントにおいて理性が「自由」につながっていることが意外と理解されていないというのが，正答率から見受けられた傾向である。問７は，実存の思想をめぐる知識問題である。やや簡単すぎるかと思われたが，実存の思想自体が分かりにくいものであるので，難易度はこのくらいが適当という評価であった。問８は，先生がゲーテの考え方を紹介し，そこからまた生徒がハイデガーの技術批判の思想を想起するという会話文の流れ全体を読み取る読解問題である。読解自体は容易だが会話文の流れは受験者に新鮮なものだっただろうという評価であった。会話文を作ることに苦労したが，対話によって弁証的に表現された思考を読み取ることを，倫理の読解問題の固有の形式として今後も考えていくべきだと考える。

第４問　冒頭の会話文ならびに問８を中心とする大問全体を通して，「差別はなぜ悪いのか」という論点をめぐって，差別する側に問題があるという立場と差別される側の被害に問題を見出す立場との対立を示しながら，社会的・歴史的な文脈に目を向けることの重要性を示す方向で，各設問を配置した。各設問に解答することを通して，緩やかに考察が深まるように促しながら，最後の設問で主題全体を振り返りテーマ全体をまとめた。差別というセンシティブな主題を扱うため各設問の表現等には細心の注意を払いつつ，主題の重要性に関連する設問をできる限り配置したつもりである。この点は，評価においても，若い世代に関心をもって考えさせたい現実社会の諸課題を取り上げた出題者のねらいが推察できる，と一定の評価を頂いた。

各設問については，上述の主題と関連した出題になることを意識しつつ，大学入学共通テストで求められる資質・能力を問うことを目指し，現代の倫理的諸課題，青年期の課題の各分野をバランスよく出題することを心掛けた。問１は，フェミニズムとボーボワールの思想内容の知識を問う問題である。思考力を組み合わせる形式上の工夫があるとなおよい，との指摘を頂いた。作題者としては主題に即した正確な理解を問う意図であったが，指摘通りさらなる工夫が必要であり，今後の課題としたい。問２では，「諸資料を活用し，必要な情報を読み取り，倫理的諸課題をとらえる」力を問うた。オルポートの偏見についての資料読解であり，現代的にも再評価されている重要業績について教科書での扱いが薄い点を補う意図があった。ただ，国語力だけで解けると指摘を頂いた通り，知識との組み合わせや具体的事例への適用という形の作り方もあったかもしれない。問３はグラフ読み取りであり，「倫理的な見方や考え方を働かせて，論理的に思考する」力を問うた。また，ステレオタイプが実際の判断や行動にどのように影響しているかをデータとして提示することで，教科書知識にとどまるのではなくその影響を実感させることをも意図した。作題者の意図通り，メッセージ性と設問に取り組むことで学びがある良問，として評価を頂いた。問６は，「子ども」についての思想家の思想内容を問う知識問題であるが，細かい知識を要求しているとの指摘があった。作題者としては，心理分野で出題できる思想家が教科書の制約と重複回避のために限られているため，知識問を作成するのは非常に困難であった。今後は，制約があるものの，資料の活用などにより思考力を問う問題上の工夫という課題があると考えている。問８は，ジェンダーに関する日常的な発想を批判的に捉えなおす内容の資料を読解させ，生徒の発言という形式をとることで読解に加えて応用力を問うた。この点は作題者の意図通り，身近なジェン

ダー問題や性別役割分業などに置き換えた選択肢が，倫理の学びが現実問題と背中合わせであることの象徴として意義深い，との評価を頂いた。問９は全体のまとめとして，思考力を問うと共に，現代社会における重要な問題に対する一定のメッセージを示唆することを意図した。この点は，解答を通してテーマ全体を考えさせ，選択肢それぞれが授業でも取り上げやすい内容となっておりメッセージ性が強い，とのコメント通り，大問全体のまとめとして，一定の役割を果たしたと考えている。

３　出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教科担当教員や教育研究団体より，試験問題の内容・範囲，試験問題の分量・程度，試験問題の表現・形式等について，多面的に意見・評価をいただいている。

以下，これらの意見・評価について，本部会の見解を述べる。試験問題の内容・範囲についてであるが，それぞれの大問と設問については，上に個別的に見解を記述しているので，ここでは，全般にわたる指摘について述べたい。

まず，高等学校教科担当教員からは，「全体としては，適切な分量であった問題の難易度は，全体として，標準的な難易度であった。出題内容や出題の分野のバランスの面でも適切なものであった」という評価を得た反面，「資料の読解のみならず倫理的な知識を踏まえた上での資料の考察等，知識をより活用させる形での設問とする工夫及び選択肢の工夫により，適切な難易度にしていただきたい」という指摘もされた。今後，思考力等を発揮する学習場面の必然性をより考慮して，多様な学習場面の設定の工夫をする必要がある。

試験問題の分量・程度については，「試験問題の分量は，大問４，総設問数33であった。各大問及び各設問における原典資料等が豊富にあり，会話やその展開には，メッセージ性があった。全体としては，適切な分量であった。」との評価を得た。

試験問題の表現・形式については，「各設問の文章表現・用語については，受験者にとっておおむね適切であった」と評価された。また図や写真を活用しようと試みたのであるが，「今後，更に図や写真等を活用し，考察させる設問の工夫を期待したい」と指摘された。図や写真等を活用し，知識を踏まえて考察させる設問を今後工夫していく必要がある。

また関係教育研究団体からは以下のような肯定的な意見をいただいた。「出題内容は学習指導要領に掲げられた教科・科目のねらいおよび内容におおむねそくしており，基礎・基本を重視したものとなっている。平易な問いを中心に高校生が学習した知識や涵養した思考力に基づき，考えて解いていく工夫が施されている標準的な問題である。」

４　ま　と　め

今回は２回目の共通テストであり，問題作成部会はコロナウイルス感染予防をしながらの問題作成だったため作題に当たり多大な困難に直面した。そのような状況下で努力して作った倫理の問題に対していただいた肯定的評価は，今後の作題に向けて大きな力となるものである。しかしそれは同時に，その長所をさらに伸ばしていくべき課題でもある。基本的な知識の確認，思考力・判断力・表現力等を問うこと，高校生の学びの指針となるだけでなく高校生への明確なメッセージとなること，大学人としての叡智に裏付けられた質の高さを維持すること等の課題達成にさらに取り組んでいきたい。またその際，問題作成方針に沿いつつ，受験者に，教科書で学習した基本的な知識を踏まえ，多様な資料を活用して考察させる質の高い問題を作っていきたい。